

# 御 嶽 山

## 山スキーツアー



98/04/11-12

メンバー

天候 晴れ

加藤一雄	50才	(L)
大塚賢一	43才	(SL)
轟 祐彦	34才	
木倉 博	35才	
田中 彰	24才	

## 御嶽山山スキーツアー入山届け

日 時 --- '98/4/11-12

コース --- 御嶽ロープウェイ終点～剣が峰の往復

内 容 --- 下の駐車場付近でテント泊

テントはモンベル (7人用) の私のを持参します。

当然雪上キャンプとなるためにシュラフは-5度～-20度ぐらいがよい。

装 備 --- 山スキー道具一式 (板・ツアーブーツ・シール・クトー・ストック・ワックス・板引き紐・スパッツ・手袋)・サングラス・高度計・コンパス・笛・1/25000の地図・武器 (+ ドライバー・プライヤー・ステン針金・ソーイングセット・ビンディングに合うボルト&ナット)・細引き

### 服装

#### 行動着

ゼロポイントアンダーシャツ&タイツ&パンツ・ニッカズボン・ウールチェックシャツ・フリースベスト・ロング靴下

#### 予備

ゼロポイントアンダーシャツ&タイツ&パンツ・靴下・フリース長袖上下・足袋 (テント内)・ゴアテックスオーバーパンツ&ウエアー・フリースマスク・手袋厚手

持参品 --- ワンタッチアイゼン・ピッケル・カメラ・細引き・ゴアテックスシュラフカバー・エアマット・テントマット・ゴミ袋 (大、中、小)・トレペひと巻き・水2L・テルモス300mL・ウイスキー300mL (特上)・タオル小・軍手・ビール500mL・酒の肴・ヘッドランプ・ザックカバー・筆記用具・非常食・シェラカップ・スプーン&フォーク・ファーストエイドキット

共同装備 --- カメラ・ビデオ・テントマット・ラジオ・雪袋・テント・コッフエル・バーナー・ガス

食 料 --- 2回分の行動食 (パン・チョコ etc)・ラーメン1ヶ・ジフィーズ3ヶ

待ちに待ったこの日がやっと来た。

この御嶽山は加藤リーダーも初めてなので全員が初入山なので山自体がこういった地形をしているのか分からないので、入念に地図の確認をしてコンパス、高度計を合わせる。

天気が土曜日が快晴で日曜日が午後から下り坂のため一日のうちに頂上のピークの剣が峰3067mを踏んで高低差1500m、5-6kmを大滑降するといった計画である。

加藤宅をAM2:00に集合して、一路中央道の中津川を目指して私のハイエースを飛ばす。ツアーが5人ともなると、ましてや山スキーでキャンプなので相当の荷物なので乗用車では荷物を乗せるのは不可能なのである。中津川から19号線を北に元橋で木曾川を渡り御嶽スキー場1550mに着いたのがAM8:00である。ここはGWまでスキー場が営業しているので朝から大変な人で賑わっている。ざっと500-600人はいるだろう。

ここから見る御嶽山は実に立派で素晴らしい眺めである。また東の方に乗鞍岳が真っ白い頭



を出している。早速ロープウェイの片道券1400円を5枚買う。ちなみにロープウェイは7:45に運行しているのがありがたい。柵池の8:30とは大違いである、この差の45分間といった時間は金にもあたいするほどの価値がある時間である。

**2160 m、8:36、12度、ロープウェイ終点。**このロープウェイはまるでゴンドラと一緒に6人乗りであった。いきなりの2160 mといった高度をかせいでしまう。ここからシールを付けてアオモリトドマツの樹林帯に入っていくのだが、リーダーがザックを下ろしたまま5 mほど登って「早よ行くでー」、初めての山なので気持ちがウキウキしてのいきなりおおぼけで全員大爆笑であった。

**2310 m、10度、小休止。**天気は快晴ですごく暑くアンダーシャツ1枚になる。

氷ノ山のブナ林の大変きれいだアオモリトドマツ林もなんとも言えないくらい色鮮やかで雪の白と空のブルーにマッチして目にやさしくそして体一杯にフィトンチッドを浴びてさわやかな風に吹かれてのシール登降は体にすごく新鮮な感じを与えてくれている。

**2340 m、9:30、アオモリトドマツのティンバーラインである。**視界がグーンと開けて雄大な純白の御嶽山が雲一つ無い青空をバックにそ

びえ立って、「おはよう、早く登ってこい！」と言葉をかけてくれているように今我々のパーティはここ御嶽山と同化した気分です。左前方に金剛堂の避難小屋が見えてきた。この御嶽山は信仰の山でところどころに避難小屋がありそのすべてに数体の地蔵さんが祭ってある。

**2450 m、ついに御嶽山のティンバーラインである。**ダケカンパの木であろうか？、厳しい自然にうち負かされて枯れているかのようであったがなんと近くで見ると枝から新芽が芽吹いて息づいているのではないか、「すごい！」の一言である。

北方面に乗鞍岳そしてその後ろに北アルプス連峰の真っ白い山々が連なっているのが高度をかせぐに連れて大きくはつきりを見えだしてきた。東方面には中央アルプス連峰である。素晴らしい景色である、こう言ったご褒美があるから山はやめられない。

**2510 m、非常に大きなカールをシールで一步一步確実に踏み出して行くが、酸素も薄くなって呼吸が苦しく、脈も高鳴っている。**

**2540 m、小休止。**一度スキーを足から外せば腰まで潜ってしまうので、スキーの行動力はたいしたものだとつくづく感心する。雪の下からハエマツが今か今かと新鮮な酸素を吸いたいと言いたげである。我々のパーティの以外に数パーティが登ってきている、登山者・スキーヤー・ボーダーと色々である。

**2650 m、10度、装備変更、クトー装着。**酸素が薄くなって、「はあはあ、ぜいぜい」の息がだんだん激しくなってくる。雪がフィルムクラスト状態なのでクトーがよく効いている。上を見ればもうそこに覚明堂の避難小屋が見



えるのにここからものすごいバーンでシール登降限界ぎりぎりの急坂である、ひとたび転べば500mほどを一直線に滑り落ちるであろう。「御嶽山よ、我に力を与えて見守ってくれ！」と心につぶやく。北アルプスの初山スキーの立山の一の越しの登りを思い出して一歩一歩ゆっくり確実にシール、クトーを効かせて高度を稼いで行くが、雪質が悪くてクトーに雪団子が付いてしまえば、完全に登れない急坂である。その時は装備変更でアイゼン、ピッケルだ。みんなはリーダーの確実な判断で装備変更をしてアイゼンを装着してストックをピッケルに持ち替えての登降をしている。

2845 m、11:45、6度。覚明堂の避難小屋到着。石鳥居があり、真っ黒の2m程のお地蔵さん覚明霊神が迎えてくれているが立ち寄りず高度を稼ぐ。ものすごい急坂である。ここは狭くて私のスキーテクニックでは歯が立たないであろう。もうワンピッチ150mほどの開けたところでみんなを待つことにする。

2945 m、11:56、小休止。剣ヶ峰3067mがもうそこに見えるがみんなを待つことにする。彼らは壺足のために相当遅れて、40分待

ちである。

2950 m、右下に二ノ池が見えているが一面氷に閉ざされて雪をかぶり真っ白である。その縁に避難小屋の屋根が見えている。まるで**昨年のGWに縦走した白馬連峰の白馬大池付近**を見ているかのように景色が似ている。

3015 m、剣ヶ峰にあと一歩のところであるが、さすがに3000mを越えると10m、

20mで足が前に出なくなってしまうほど息、脈が上がってしまう。**こんなことで富士登山走を完走出来るのか疑問である。**

3067 m、13:43、2度、剣ヶ峰山頂。大きな石鳥居、玉垣、地蔵さんが数体、祭られている。ここから見渡す360度は今までのつらさが吹っ飛んでしまうほどの素晴らしい景色である。乗鞍岳、北アルプス連峰、中央アルプス連峰、おまけに白山までが一望できてしまう大パノラマである。みんな思い思いにシャッターを切りビデオを回している。我々のパーティは5人であるが、加藤リーダーとアキラがツアーの前後でビデオを回してくれていて私が一眼レフのスライドフィルムで撮影して紀行文を作り、キクちゃんと轟さんがカメラ撮りで、帰ってからのみんなの編集が大変であるが、あとあとまで残る記録集ができるので大変楽しみなのである。

14:42、山頂で1時間ほど休憩して下りの地図の確認をとって、さあ待ちに待った剣ヶ峰山頂よりの駐車場までの**高低差1500mの5-6kmの大滑降開始である。**

しかし、少し下った二ノ池の急斜面で**キク**

## 頂上剣ヶ峰3067m



ちゃんが大滑落をしてしまった、二回ほど回したところでアイスパーンにエッジをくわれ50mほどのすごい勢いで滑落である、体は一回転しおまけになぜか流れ止めが外れて右の板が湖面まで一直線に無人での直滑降で最悪の状態である、私は大声で「怪我は無いか〜」、「大丈夫や!」。彼は板が外れているのがわからない様子なので「壺足で板を取りに行ってゆっくり上がって来い!」と言うと驚いていた様子であった。みんなと合流

すると、なんと流れ止めがたエッジで切れていたらない。

2180m、16:30。5-6回転び回ってロープウェイ乗り場に到着。ゲレンデも終わっていて静かなものである。しかし、この登山口の50mほどの幅に目がけてあの樹林帯の中を滑ってこなくてはならないのかと思うと大変なことである、今日は登山者の壺足のトレース通りに滑ってきたが、これが新雪で消えていたらたしてドンぴしゃりにここへたどり着くのかと思うと疑問である。リーダー

「むつかしいなあ」と首を傾げていた。

このスキー場は600mの高低差があるので滑りごたえのある斜面であるがもう足が悲鳴をあげているのでゆっくりの滑降である。途中でアキラとキクちゃんは加藤スキースクールを開校してもらっていた。

しかし、いつもながらキクちゃんは「このゲレンデはこんな悪い雪でなん

でお客が来るもんや」とまたまた自分のテクニックを棚に上げてぼやいていた。リーダー曰く「山スキーヤーはいついかなる場合でもどんなに悪い雪でも滑りこなす、それが山スキーヤーなんや!」、キクちゃんは「……」

大滑降も堪能し、さあ今から駐車場近くの草原で「ホテル御嶽」の設営である。ここはまた抜群のキャンプサイトで回りには誰もいない静かなところである。今滑って来た御嶽山

をバックに雪で冷やしたビールで「御嶽

カンパイ」で、実にうまいビール

ある。テント内では素晴らしかった今日一日の行動パターンを語り合っていて疲れているはずなのにブランドーが体中に行き渡りつつい飲み過ぎてしまったようである。無理もないこんなに素晴らしい体験をしたのだから……。

次の日は小鳥のささやきで目が覚めて中央アルプス方面からの御来光を拝んで、非常に贅沢に近くの鹿ノ瀬温泉で汗を流しての帰路となりました。帰宅は14:でした。



二の池の急斜面を大滑降の加藤氏